組織的に「寛大」の処理方針を貫いたのである。この労力は、日本人戦犯への配慮、施策よりも何倍も多くの時間と苦労を掛けたと思量する。

こうした寛大さは、一方で中国共産党指導部が、当時日本が日米同盟を強めていたことに対し、日本の親中国民間団体を通して、日中国交回復を念頭に「以民促官」を進めた対日戦略の一環であった。著者は中国の公開された外交文書を精査することで明解に記述している。

残念ながら毛沢東個人の考えや言動についての記述は少ないが、この「寛大」策の発想の根源は、毛沢東の大事に対する、彼特有の次局面に合理的な価値、解を求める「大意」、即ち、劇的な対抗的な政治判断が働いたものと見る。

帰国後の元戦犯の彼らは「中国帰還者連絡会」を結成し、反戦平和や日中友好を訴えていく。だがその団体は日本政府の戦争への総括に踏み出せない姿勢に度々ぶつかり、時には内部対立だけでなく、悲劇的な憤慨に堪えない（主に太原組）事象まで生み出し今日に至っていること、また、中国側の文革や改革開放の政治状況に翻弄され、内部分裂、敵対行動に至る様子を改めて、この書によって多く、深く知らされた。

歴史問題は今日も日中間の最大の懸案となっている。この１５２６名の告白や帰国後の行動は今でも大きな課題を含んでいる。戦後の総括は日中間、東アジアのテーマだけでなく、東京裁判、ＢＣ級裁判、更に欧州における敗戦国ドイツ戦犯への評決を含めて、比較評価を深めることを感じさせる貴重な一冊である。特に、当協会の会員に、かの戦犯関係者がいることを考えると、当事者に寄り添って、もう一度、戦争の総括に身を置くこと、大切と思う次第。

出かけてみました

〈戦争は人間を悪魔に変える〉検証の旅

渡邊澄子（会員）

２０１５年８月、本協会の企画に参加して中国東北部（旧満洲）を旅行した折、一番の目的だった七三一部隊跡の広大さには唖然とさせられたが、肝心の「罪証　陳列館」は改装のため入館禁止で、失望は大きかった。「戦争の出来る国」にひた走る近年の政情に危機感を募らせている私は、戦争の実態を知り、知らせねばならぬと大袈裟に言えば悲壮感に捉えられている。

博論を指導した留学生の中で最多だった韓国人の書く論文に頻出する「植民地時代」について、韓国人の身に寄り添って理解してはいなかったことに気付き、「植民地時代」を調べてみた。文学面からとりかかり、いきなり驚愕させられた。戦時下の韓国で、唯一刊行を許可されていた文学雑誌は『国民文学』だけだった。「国民文学」の「国民」とは日本のことで、韓国を「朝鮮」と改名させ、韓国人を日本人に変える皇民化の徹底強制の凄まじさに、私は日本人として身をよじる罪悪感に苛まれた。父祖から受け継いだ姓名を日本名に変えさせ、徴兵制によって若者が日本兵として

「出征」し、さらに特攻隊員として死ぬことを栄誉と称えているが、その推進者が、学生時代に尊敬していた著名な学者たち、作家たち日本人だった。多くの日本人は私の周囲をはじめこの事実を知らない。この雑誌について「戦時下雑誌『国民文学』の位相」（大東文化大学紀要、１９１４～17、⑴～⑷）として発表してきたが、その作業に平行して、戦争の主体者は男性だが、女性が積極的に援け励まし勇気付ける役割から主体者になっていく過程を「女性の戦争責任」問題として編集したりもしてきた。

中国東北部旅行は私にとって貴重な体験となった。あの草原の広大無辺さへの驚愕に「百聞は一見に如かず」の真実を教えられたことにもよる。皮相的検証になることを自覚しながら、それでも「戦争の悪」の検証作業になればと、２０１６年１月30日から２月４日にかけてアウシュビッツ・ビルケナウ強制収容所に行ってきた。アウシュビッツは著名な『夜と霧』はじめ、幾冊かの本によってある程度は知っていたつもりだったが、その程度では無知にも等しいものだったことを思い知らされた。総称してアウシュビッツ強制収容所と呼ばれているが、実は、アウシュビッツ１号（収容者数は１万２０００人～２万人）、２号のビルケナウ収容所（最大収容所で９万人以上）、３号のモノビッェ収容所（１万１０００人）の３か所と小さな約50か所の副収容所（その一つにハイデルベルク大学に客員教授として赴任していたとき行ったことを思いだした）から成り立っていたのだ。頭髪はじめ全身の毛を剃られて真裸にされ好色と残忍な眼に監視されながらシャワー室と言われてガス室に追い込まれる無数の女性たちを映像に残す残忍さも人間の一側面なのだ。毛髪、ハイヒールや子ども用も多数混じる靴、眼鏡、ハンドバッグやスーツケース等の山、毛髪で織った布や服や袋物等々、目を覆いたくなる部屋々を巡る私はその１つ１つに１人１人の人生を思い震えが止まらなかった。ビルケナウはアウシュビッツどころではなく巨大だった。木造の「囚人」棟は最後尾が見えぬ程続いている。ガイドが、ここは広大すぎるからここから眺めるだけで次ぎに行きますと言ったので、私はあわてて、こちらの方が規模が大きいのですからぜひ見たい、見させてくださいと、同行の方々の意志確認もせずに食い下がった。私の執拗さに仕方なさそうに、それでは少しだけとほんの少しだけ内部に案内された。強烈な印象を受けたのはトイレだった、アウシュビッツでは冬期が思いやられる粗末な板張り部屋の真ん中に30センチ弱の穴のある板が１枚だけ前後左右何の仕切りもなく並んでいるだけで、壁には監視窓。男の目に監視され、他人の目にさらされて排便する恥辱は、人間の尊厳の放擲であろう。ここで私は用をたせるだろうか。できない。涙がこぼれた。だが、ビルケナウはさらに苛酷だった。20センチほどの間をおいて25センチほどの穴が開いているだけの板が仕切りなどなく３枚渡されていた。壁には監視窓。人間であることをやめなければ生きていけない場所なのだ。もう涙も出ない。毒ガス入りの空き缶、死体焼却所、花束の供えられた数千人が銃殺された「死の壁」に頭を深々と垂れる。捕らえられて囚人とされた人は当初は登録され写真も撮られているが、後には未登録で犠牲者名は不明なので確実な人数は掴めぬが、連行されたのは約１３０万人、殺害された人数は約１１０万人という。

私一個の執拗な要求で、不満の残る一部見学だが見ることができたことを同行の方たちから感謝されたのにはほっとした。七三一部隊との決定的な相違は犠牲者数を措くとして、アウシュビッツでは逃亡者がいたこと、所内にレジスタンス組織が

できたこと、ソ連軍による解放時に約７５００人が残っていたこと、無数の写真によって「囚人」とされた人物の特定がかなりできたことだろう。戦争は人間を悪魔に変える現実をこの目で見たが、まだ見たと言いきれはしない。もう一度しっかり見てきたいと思っている。

ハルビン平房の七三一部隊の「罪証　陳列館」完成と知って個人旅行で行ったのは４月10日からの３泊４日だった。調査不足のこの旅はまるでガイドと運転手（空港で帰国間際に２人が夫婦と知った）のカモにされに行ったようなものとなった。旧満洲時代に日本の文学者が戦地慰問で出かけ、本国民衆の悲酸な生活実態とかけ離れた贅沢を享受した彼等が泊まった当時は最高級の大和ホテル（現在は「龍門貴賓楼酒店」で、欧米系のホテルが第１位になっている）に１泊しその後は同系列の一段格下に泊まったものの、大和ホテルはさすがに往年の贅を偲ばせる建造だった。目的を何度も話したのに観光場所にばかり連れて行かれて、彼等に贅沢をさせる役割を担わされてしまったが、兎も角陳列館（３度目くらいの改装らしい）は見た。約３０００人が生体解剖の犠牲になっているというが、敗戦を察知した幹部は施設を爆破し、残っていた解剖験体用「マルタ」を虐殺して日本に逃げたので只の１人も生き証人が残されていないばかりか、解剖のメスを手にした張本人はアメリカにデータを渡すことで戦犯免責の取引をしているだけのみならず、持ち帰ったデータによって東京大学や慶應義塾大学から博士学位を得たり、大学教授職についたりの悠々の残余の生涯を送っているのだ。アメリカはこの時のデータを使って朝鮮戦争他に役立てている。石井四郎から厳重な口止めをされた下級軍人や軍属は厳しく辛い生活を強いられ、見聞したことを話し出したのは戦後大分経ってから で、逃げ遅れてソ連の捕虜となり、裁判によって実態のおぞましさを知ることができ、アメリカによる「フェル・ヒルリポート」がその裏付けとなるが、その残忍さをこの小さな枠内では伝えきれない。項を改めたい。凍傷実験の人形や、細菌増殖のための蚤や鼠の飼育などはリアルに再現されていて恐怖に震えるが、生き証人絶無は決定的隘路だろう。買い集めた20数冊（そんなにも出版されていたのだ）を読みこみながら怒りが噴き出し、言葉を失う。ビルケナウにはぜひもう一度行って来たい。紙幅の都合で結論的に言えば、戦争は人間を容易に悪魔に変えると断言できることだ。

私は10数年前から毎年、６月28日から７月１日にかけて秋田の大館で開催の戦争末期に花岡鉱山に連行された中国人惨殺の「花岡事件」慰霊祭に参加しているが、郡山の白坂に「アウシュビッツ歴史博物館」のあることを知って寄ってきた。どこで見たのか、ナチスに殺される場面などを描いた子どもの絵の展示は衝撃的だった。これを描いた子どもたちは無事に生き残れただろうかと、涙が溢れた。

その後、七三一部隊について「ＡＢＣ企画」と言う組織があって活動を続けていることを知り、小平の事務所に行き、種々の情報を得たのでさらに深く学びたい。危機感濃厚な現状の進行阻止に焦燥感の深まる昨今である。日本が植民地とした台湾に本協会企画の旅行に参加したことを付け加えて雑駁な報告としたい。とりわけ七三一部隊について何ほども書けなかった憾みをはらすために、20数冊読了後、ビルケナウを再訪して論文にまとめるつもりである。